

【宗祖法然上人御法語】

(第三) 聖浄 二門 しょうじょうにもん

1

「或る人、『上しょうにん人にんの申させ給う御念仏は、念々ごとに仏の御心みこころに適かない候そうろうらん』など申しけるを、『いかなれば』と上しょうにん人にん返し問われければ、」

ある人が、「法然上しょうにん人にんがお称えになるお念仏は、その一念一念が阿弥陀仏のご意向かなに適かなっているのでしょうかね」などと申し上げたのに対し、「どういうわけかと、上しょうにん人にんは問い返されました。

2

『智者にておわしませば、名号みょうごうの功德をも詳しく知ろしめし、本願の様をも明らかに御心おんこころ得ある故に』と申しけるとき、」

そこでその人は、「智慧の深い方でいらっしゃるので、名号みょうごうに具そなわる勝すぐれた特性をも詳しくご存知で、本願のありさまをもよくご理解なさっているからです」と申し上げました。その時、

3

「汝本願を信ずる事、まだしかりけり。」

法然上しょうにん人にんは、「あなたの本願への信心はその程度だったのですか。」

4

「弥陀如来の本願の名号は、木こり、草刈り、菜摘み、水汲む類のごときの者の、内外ともにかけて一文不通なるが、称うれば必ず生まると信じて、真実に願いて、常に念仏申すを最上の機とす。」  
阿弥陀如来の本願である名号は、生業として木を切り、草を刈り、野菜を摘み、水を汲むような人々で、仏典と仏典以外の書物のいずれについても文字一つ知らない人が、称えれば必ず浄土に生まれると信じて、いつわりの無い心で願い、常に念仏をお称えする、そうした人を救いの最適の対象者とするのです。

5

「もし智慧をもちて生死を離るべくば、源空いかで彼の聖道門を捨てて、此の浄土門に趣くべきや。」

もしも智慧によって迷いの境地を離れることができるならば、私、源空がどうしてもあの聖道門を捨てて、この浄土門に帰依するでしようか。

6

「聖道門の修行は、智慧を極めて生死を離れ、浄土門の修行は、愚痴に還りて極楽に生まると知るべし」とぞ仰せられける。」

聖道門の修行は智慧を極めて迷いを離れ、浄土門の修行は、愚かな自分に立ち返って極楽に生まれると理解なさい」とおっしゃったのです。